平成２７年３月５日

「この人に聞く」成熟社会と建築

東京都庭園美術館副館長

岡部　友子（おかべ・ともこ）氏

プロフィール　昭和 58 年 4 月（財）東京都文化振興会入団、東京都庭園美術館開設準備に携わり、平成 15 年まで 19 年間東京都庭園美術館学芸員として勤務。平成 15 年 4 月　（財）東京都歴史文化財団事務局　営業企画課　企画係主任を経て同事務局総務課企画担当係長。平成 18 年 4 月より 22 年まで東京都写真美術館で普及係長、企画係長を務める。平成 22 年 4 月東京都庭園美術館展示係長、学芸担当課長を経て、平成 25 年 4 月同館副館長となり、リニューアルオープンの管理・運営に携わる。

（前文）

リニューアルオープンした東京都庭園美術館について、副館長を務められている、岡部友子氏に改修のコンセプトや今後の展望などについて伺った。

■リニューアルまでの経緯

東京都庭園美術館は昭和８年に建てられた旧朝香宮邸を美術館として一般公開する趣旨で、昭和 58 年に開館した美術館です。リニューアルオープンした昨年で 31 年目となり、私どもとしてはリニューアルオープンと開館 30 周年という節目の年に新館を得て新たなスタートを切ったわけです。

朝香宮邸が昭和８年に建てられて、昭和 22 年に朝香宮様が皇籍を離脱されてからは、外務大臣を兼務していた吉田茂首相が、ここを外務大臣公邸として昭和 29 年まで使用されました。外務大臣公邸の役割を終えた後は、国の迎賓館として、赤坂に迎賓館ができるまでの昭和 30 年から昭和 49 年まで、

その機能を担うことになります。そして、東京オリンピック開催の昭和 39 年に、西武鉄道が新館として旧朝香宮邸官舎跡に、宿泊と迎賓機能を備えた建物を建てました。

昭和 56 年に旧朝香宮邸の土地と建物が東京都の所有となり、昭和 58 年より美術館として一般に公開され今日に至っています。1910～30 年代に欧米で流行したアール・デコ様式がほぼ完全な形で残る貴重な歴史的建造物として、平成５年に東京都の有形文化財に指定されました。

この度の改修工事では、本館は外壁及び機械設備の改修、新館は老朽化と耐震強度の問題のため改築することとなり、現在の新館が誕生することになったのです。

■改修におけるコンセプト

改修工事にあたっては、単なる老朽化対応の改修だけではなく、美術館のあり方も見据えたうえで設計に着手することとなりました。

まず庭園美術館の事業の方向性が検討され、その結果打ち出された改修におけるコンセプトが「歴史的価値の保護と新たな価値の創造」という言葉でした。

庭園美術館は、文化財である建物と、その中で展示を見せる美術館機能、そして都心には珍しく緑豊かな庭園を併せ持つ美術館として親しまれてきました。しかし、美術品の展示と建物の鑑賞を同時に行っていくには、スペースが限られており、ともすると展示が優先し、建物の細部まで見せられないこともままありました。そのため、あり方の検討において、本館の文化財的な価値をさらに見せていくスペースと機会の拡大が求められたのです。

そこで、新館に新しく展示スペースをつくり展示面積を広げることで展示機能を補完し、本館の建物本来の美しさを活かしながら展示が行えるようにしました。また、本館にあった職員の事務室を新館へ移すことで、宮邸時代のバックヤードを一部公開するなど、公開エリアの拡大も可能となりました。また、改修工事と平行して、本館では壁紙の復原や家具の修復・復刻なども行い、創建当初の様子に近づけるための取り組みも行いました。

一方、改築した新館は庭園の景観を最大限取り込めるようサッシュレスの大ガラスを多用し、明るく開放的な空間が特徴の建物となりました。アプローチの特殊ガラスは一日の光の変化で光と影の表情が変わり、新たな見どころとなっています。ロビーにはミュージアムショップやカフェを設置し、お客様が楽しく充実した時間が過ごせるスペースの充実を目指しました。

改修コンセプトが示すよう、歴史的な空間に新しい景観が付け加えられ、

それぞれが引き立てあって新しい庭園美術館の魅力が生まれたのです。

■30 周年記念展

庭園美術館は邸宅空間で美術品を鑑賞できる美術館として昭和 58 年オープン以来、30 年間にわたり 150 回以上の展覧会を行ってきました。

心がけてきたのは、美術品と展示空間との相乗効果、庭園美術館ならではの鑑賞空間を創造することでした。主要なテーマとしては、工芸やデザイン、装飾美術のジャンル、本館が建てられた 20 世紀初頭と同時代の美術が挙げられます。特に開館 10 周年、20 周年、30 周年と開館記念の年にはアール・デコに因んだ大規模な展覧会を開催してきました。10 周年には「アール・デコのセーヴル磁器」展を、20 周年には「朝香宮がみたパリ」をテーマに、アール・デコ全般の家具、工芸品などを集めた展覧会を行いました。そして今回の開館 30 周年記念展では、アール・デコをさらに掘り下げようと「アール・デコと古典主義」をテーマに展覧会を組み立てました。

庭園美術館のアール・デコの意匠は、モダンな中にも古典主義的な要素を含んだところに特徴があります。この建物の主要部分をデザインしたアンリ・ラパンはアール・デコの中でも保守派に属したデザイナーで、この建物の中には花手綱や花籠、飾り鉢など古典主義的なモチーフが散りばめられています。この展覧会ではアール・デコのルーツの一つである古典主義に着目し、同一の観点でつくられた家具、絵画、工芸品を主にフランスの９つの美術館から出品いただき、朝香宮邸のアール・デコの本質をあらためて考える機会としました。また今回の展覧会では、同時代の家具などを置いて室内を再現し、アール・デコの空間を総合的に見せることを狙いとした「アンサンブル展示」の手法を取り入れました。これは、庭園美術館ならではの体験ができる鑑賞空間だと思います。

■今後の事業展開

今後の事業については、アール・デコ様式の特色ある空間と、新館の新たな展示室を効果的に組み合わせ、幅広い知的な関心と美的な体験への欲求に応える展覧会や関連プログラムを実施していきます。

次の展覧会は４月 25 日からのケ･ブランリ美術館所蔵の「マスク展」です。アフリカ、アメリカ、アジア、オセアニア 4 大陸のマスク 100 点を集めたユニークな展覧会です。夏には本館で建物公開展、新館では小企画展「個人コレクションによるアール・デコ名品展」を併設して行います。秋には現代ジュエリーを代表する作家「オットー・クンツリ展」、年が明けてからは「ガレ

の庭」と題し、エミール・ガレのガラス工芸とその原画をあわせて展示します。

庭園については「マスク展」より芝庭を公開しますが、その他の庭園については整備が終了次第、順次公開していきますのでご期待下さい。